



日本GAP

19 仙台支部報

No.

IGAP-JAPAN SENDAI INFORMATION

編集人：安藤澄雄
 発行人：笠原弘可
 発行所：日本GAP 仙台支部
 〒980 仙台市東十番丁1番
 国鉄アパート1-18
 頒価 無料 送料 60円

—1984年仙台・山形合同支部大会講演「暮らしの中のアダムスキー哲学」より—

イメージは実現する！

《前編》

太田節子

さて今度は、自分の望みをかなえるためによく用いられる方法——「イメージを描く」ということについてお話ししたいと思います。私がこの方法を用いて初めて望みを達したのは、今から5年ほど前のことです。私はある電機メーカーに勤めていて、年に何回か社内製品のパーゲンがあり、型遅れの製品を安く買うことが出来ます。でも、パーゲンに出される製品の数には限りがあるため、申込者が多い時には必然的に抽選となります。

競争率は31.5倍！

ビデオデッキがパーゲンに出されたのは、その時が初めてでした。今でこそ珍しくなくなりましたが、そのころはまだビデオを持っている家は数えるほどだったと思います。当然人気はウナギ登り、しかも多少型遅れではありますが、定価22万8千円のビデオが何と格安の2万円とあって申込者が殺到しました。最終的な会社発表によれば、20台のビデオにたいして申込者が何と630人！競争率は31.5倍！当時の社員の約2人に1人が申し込んだ計算になります。あまりに高い競争率に、大抵の人は抽選前から「当たるはずがない」とあきらめていたようでした。でも私はどうしてもこのビデオを当てたいと思いました。というのも、ある目的のためにビデオを是非使いたかったからです。

私は今こそ「イメージ法」を利用して望みを達成する時だと思いました。私は家族の者に「競争率は高いけれど絶対ビデオを当ててみせる」と宣言しました。そして大胆にも、仕事のパートナーに対しても、同じように「必ず当たる。絶対当ててみせる」と宣言したのです。私はビデオが当たってからこのことをあれこれと考え、ご丁寧にそれを置く場所まで確保して抽選の日を待ちました。私があまり「当たる。当たる。絶対当たる」と自信ありげに言うものですから、次第に家族の者もそ

の気になってきて、しまいには本当に当たるものかと思ひ込んでしまったようでした。そうすると私自身もますますファイトがわいてきて「よし、絶対当ててやろう！」という気持ちになり、抽選の日にはもう「当たって当然」と思えるくらいになっていました。

手はつくした

抽選は、昼休み12時キツカりに公開で行われることになっていました。いつものパーゲンであれば、人気商品があまり出て来ないということもあって、競争率もそれほど高くなることはなく、従ってそれまで公開で抽選が行われたなどということは1度もありませんでした。私たちはそれまで、抽選日を知らされたことは1度もなく、ましてや抽選時間などに至っては知る由もありませんでした。いつも私たちの知らない日知らない場所で抽選は行われ、私たちは結果発表をただ待つ以外になかったのです。

そのとき、抽選日・抽選時間そして抽選場所が発表になったということは私にとって非常に都合でした。なぜなら、まさにその抽選時間に、一番効果的と思われる時間に「イメージを描く」ことが出来たからです。

私は抽選時間に、その場所には行きませんでした。というのも、なにしろあれだけの競争率でしたから、黒山のような人だかりになることは容易に予想できませんでしたし、そんな人がワイワイゴチャゴチャしているところでは、とてもイメージなど描けそうもなかったからです。それにイメージを描いている最中に、知っている人に出会って話しかけられでもしようものなら、私のことですからとてもイメージを描くどころではなくなってしまうと思ったのです。

幸いにしてその抽選場所というのは、私のいる部屋の比較的そばにあって、眼を閉じれば容易にしかも鮮明にその

付近を思い描くことが出来るほど慣れ親しんだ場所でした。抽選時間の5分前から、私は集中的に頭の中でイメージを描き始めました。まず最初に、社内製品パーゲンの申込書を頭の中に思い描きました。その申込書は黄色の用紙で出来ていて、紙の上の方に従業員番号と申込者の名前を記入する欄がありました。それらの記入の際、ペン書きは不可と断り書きがあり、各職場にある従業員番号と名前の書かれた専用スタンプを使用することになっていました。本来ならば、職場のスタンプ管理者に頼んでスタンプを押してもらわなければならないのですが、私は是非とも自分の手でそれを行いたいと思い、朝早くまだだれも来ないうちにその置いてある場所に行き、こっそり自分でスタンプを押して来たのです。私はどちらかといえば、めんどうくさがりやの方なのですが、その時だけは「望みをかなえるために自分で出来るだけのことはしよう」という気持ちになっていたのです。自らそれを申し込み受付箱に入れてきたことは言うまでもありません。ということもあり、私はその申込書にとて親しみを感じていたので、案外簡単にそれを頭の中に思い描くことが出来ました。眼を閉じると、用紙の色や印刷のレイアウト、そして自ら押したスタンプのインクの色までが鮮やかに浮かび上がって来たのです。

私は次に、抽選場所を思い描きました。そして抽選担当者が、だれかは分かりませんが、とにかくその担当者が私の申込書を抽選箱から取り出すシーンを思い描きました。周りは黒山の人だかり……。その中心でその担当者が私の申込書を高々と掲げ、私の名前を読み上げている……。そんなシーンがひとりだけで浮かんで来ました。今思えば、私自身はイメージを描いているつもりだったのですが、実際は本人も気づかないうちに「透視」をしていたのかも知れません。

次に私は当選者発表の掲示板の前で、自分の従業員番号を見つけて私が大喜びしているシーンを思い描きました。そして最後にもう一度、私の申込書、特に従業員番号と名前の部分、要するにスタンプの部分を集中的にかつ鮮明に思い描いたのです。(つづく)

第2次「エルサレム宇宙考古学の旅」感想文

印象ある地

柴田光明

意識ある実現

今回もエルサレム宇宙考古学の旅に行くことができると思ってもみませんでした。それは、どちらかというところでは海外旅行などとてもないという考えが根強く、また会社はいつも忙しいので、そう簡単には休みがとれないからです。

しかし私は旅行に行くずっと前から必ず二人で行く、すでに二人で行ったという信念とイメージを持ち続けていました。それが、どういふわけか実現し、二人で参加できたことは私にとって、とても喜しいことです。そしてこのことは何か意義のあることであると思っています。

懐かしの家

エルサレムではゲッセマネ庭園や鶏鳴教会付近の石段、主の祈りの教会の地下洞窟等が特に印象深く感じられました。また、昨年と同様に榎原氏が素晴らしいガイドをして下さったことも相重なり、とても宇宙的な旅行でした。今回は鶏鳴教会などの重要な場所をゆっくりと見ることができてよかったと思います。

イスラエル滞在中は本当の実家(?)

に帰ったような懐かしい感じで、何度訪れても素晴らしい所であると思いました。そして意識という実体が転生することはとても素晴らしいことであるという実感がわき上がってきました。参加者の会員のほとんどの人が、この地に来てとても高揚していたように思います。

イエスはたくましい人

イエスそのものは弱々しい存在でなく、とてもたくましく力強い人物で人間味のある人だったというような意義のある話を聞いたときには、なるほどこの広大な砂漠地帯を歩き回するにはエネルギーに満ちた人物でなければ成就できなかったかもしれないと思いました。ですから本当のイエスとはアダムスキーが透視して描いたイエス像そのものと言えるでしょう。

イエスがかつて歩いた石段や庭園、そして地下洞窟はとても温かい明るいフィーリングに満ちていたように感じました。こういう場所では、自分の内部の声から何か印象を得ることが大切であると思います。透視ができなくても、イメージを描きながら歩くことが重要であるとも聞かされました。外見的な建物等に感わされることなく、内

部の旧跡や情景から何かを得ることが価値あることと言えると思います。

スイス及びスイスに向う途中のみならず、旅行中ずっと上空のどこからかスペースブラザーズが私達を見守っていたような感じでもとても素晴らしい旅行でした。このような価値ある旅行を企画して下さいました田中氏及び久保田会長に心から感謝致します。

結婚おめでとう

本年3月に仙台から岩手県に引越された柳村敏春氏は、6月24日にめでたく結婚された。9月23日の日本GAP総会にはご夫婦で出席され、少し照れくさそうに奥様・公子さんを紹介して下さいましたのが印象的だった。いつまでもお幸せに!

月例研究会案内

日本GAP仙台支部では、下記の要領で毎月研究会を開いています。遠近を問わず、お気軽にご参加下さい。

◎日時：毎月第4日曜日

13:10~16:20

◎会場：仙台市民会館 会議室
(仙台市、西公園内)

◎内容：久保田会長講演テープ公開、
テレバシー練習、座談会、他。

◎会費：300円

編集後記

◎ほぼ4カ月ぶりに仙台支部報をお届けします。編者の転居等で大幅に遅れてしまったことをお詫びします。

◎本号より体裁を変え、文字も大きくして読みやすさを図りましたが、いかがでしょうか? なお、保存にはA4サイズの2穴パンダーをお求め下さい。前号までの支部報も一緒に保存できます。

◎6月24日の仙台・山形合同支部大会は、おかげ様で大成功でした。参加者人数は例年より少なかったものの、会場に流れる高次な雰囲気は、参加者が確実に向上していることを感じさせました。来年は山形県米沢市で開催する予定です。是非ご参加下さい。

◎その大会では、仙台市の太田節子氏が体験講演をされましたが、これを第1面に掲載しました。しかし紙面の都合でほんの一部分しかご紹介できないのが残念です。次回後編もお楽しみに。

◎柴田光明氏の「大地」は、氏の環境が当初の予定と変わってきて、同タイトルでは連載できなくなりましたので、残念ながら中止します。しかし今後は別の内容でご寄稿下さるそうです。(A)

草原

怪足、6番打者 笠原弘可

先日、職場のソフトボール大会があった。私はライトで、6番である。なんだ、と思われるかも知れぬが、上手下手より年功が物を言う社会なので、レクリエーションといえども止むを得ないのだ。毎年のことであるが、珍プレーが続出し、楽しい一日ではあった。

私が2塁に出た時である。次なる打者はセンター前にクリーンヒット、私は自慢の足に物を言わせ、3塁を越した。タイミングは完全にセーフだと私は思った。ザザッとばかりにスライディングした、までは文句の言いはない。「アウト!」。私の目測では、脚はホームベースに到達しているはずだった。現実には冷たく、20センチ及ばなかったのだ。私の見解では、晴天続きのため、土の滑りが悪かったのが原因だったのである。脚の長短を問題し

て笑った無礼者がいたが、その人は次の打席で三振して、皆に笑われた。宇宙哲学の探究者を笑う者は、必ずパチが当たるのである。

まあ、それは冗談であるが、その日痛感したことがあった。昔、野球をやった人達、つまり基本からみっちり訓練をした経験のある人達は、かなりの年配者でも、素人とはその守備・打撃に格段の差があるということだ。

宇宙哲学の探求でもしかりだなあ、としみじみ感じた。最近、とみに足元を見失いがちな自分自身、大いに反省した次第である。スポーツでも何でもそうだが、主体性を持って、自分自身の頭で考え、自分自身で体験していかなければ本物にはなれない。他人の言葉で身を固め、他人の経験を吹聴したところで、身につくものは何もないのである。